

文化とモラルの関係について

— ジッドに対するマラルメの役割 —

立川 信子

フランス文化というと今では都市や村の風景、料理、服飾、印象派の絵画、城館や教会を思い浮かべるかもしれないが、19世紀から20世紀にかけての芸術、思想、文学の文人は世界的な影響力を持った。第二次世界大戦以後、学生運動などの社会的現象や、実存主義や前衛的な思想が発信された。日本も少なからずその影響を受けたが、そういう文化を生んだフランスの国民性という日本と対照的な説明がされることが多い。日本人はタテ社会、迎合的、画一的、集団の合意で判断する。それに対して、西洋は信仰や論理という高次の規範によって判断し、フランス人は批判的、個人主義的というイメージが作られた。ドルフェス事件のゾラや植民地統治やソビエトの政策を批判したジッドのように発言する知識人の言動は「千万人と雖も吾往かん」(孟子)の言葉に重なり、戦前の軍国主義教育に対する反省とともに、フランスに対する憧憬が戦後の日本に広がるのに寄与したといえるだろう。

国民性を取り出すのは容易ではないが、まず、フランス文化の特徴を今日の風俗を反映しやすい媒体である映画を通して考える。次に、フランスの文化には動きをカテゴリー化して、一つのイデオロギーとして芸術や思想のみならず社会的な動きまで含んだ見方を作り出す傾向がある。フランス人が文化の特質と考える論理性がその理由の一つと考えられる。文学について言えば、個々の詩や小説が独創的な美や思想の地平を開いたことは確かであるが¹⁾、個々の作品だけでなく、それらの作品の作り出すこの動きが、文学にとってはかなり大きな要素である言語の違いを超えて、影響力を大きくしていると考えられる。文化とモラルの関係を考える上で、まずフランス文化の社会的な現象としての文芸の流れ、その中でモラル、規範を重要な概念としている古典主義の役割について考察する。最後に、現実主義と象徴主義という二つの19世紀から20世紀の大きな流れの中であって、マラルメの影響を受け、象徴主義の小説を書

1) ボードレールやフローベールが、知名度が一般に低いのは文体や韻律などフランス語でしか感じられない要素のためだろう。ウンベルト・エーコは、『論文作法』(谷口勇訳、而立書房、1991年)で書物は原語で読むべきであると言っている。

こうとした後、古典主義を掲げるようになった小説家ジッドをモラル形成の例として考える。

1 今日の映画にみる生活と教育の風景

個人主義的と言っても、フランス人が生活習慣として個人として行動することが多いというわけでは必ずしもない。集団として、家族の生活習慣を言うならば、親子という核家族だけではなく、祖父母やいとこなどひろく親族や友人と長い休暇を過ごす人がフランスには少なくない。祖父母や友人たちと一週間ほどの休暇を過ごす避暑地のキャンプ場などへ向かう長い車の列は夏の初めにはいつもみられる風景である。映画は小説よりもさらにありふれた日常の映像、生活習慣、一般の人々の意識をもとにして作られることが多いので、容易にその例をみることができる。フランス映画『君のいないサマーデイズ』*Les petits mouchoirs*（原題『小さなハンカチ』2012年）では事故で重症の友人を町の病院において休暇にでた人々の後ろめたさを描くことで人間関係の親密さを映し出している。この休暇スタイルはフランス以外でも見られる。イラン映画『彼女の消えた浜辺』*About Elly*（原題『エリーについて』2010年）では過干渉の人間関係と男尊女卑が否定的に取り上げられている²⁾。核家族という現代の日本にみられる意識を取り上げるなら、フランスの方が集団的で日本の方が個人的だとさえいえるかもしれない。家族の範囲や、内と外の区別の範囲がフランスの方が広く、日本の方が狭いと言った方がよいかもしれない。

家族関係だけでなく連帯というのはフランス社会で作られた伝統と言えるだろう。ワークシェアリング（雇用の分かち合い）や社会保障などに表れている。リストラを回避するために同僚に賞与が減るのを受け入れてもらおうと説得する『サンドラの週末』*Deux jours, une nuit*（原題『2日と1夜』2014年）には連帯の観念が生きていることを示そうとしている。個人主義的な傾向は、連帯というモラルとともに発展してきたのである。

教育は人生や生活の上でモラル形成の重要な部分である。授業の様子を描いている映画はフランスにもラ・フォンテーヌの教訓で締めくくられている寓話を子供が暗唱しているシーンなど多くあり、教育の仕方を彷彿とさせる。哲学や文学、作文、論述は重要な授業であり、現代のフランスの教育の問題を提示した『20区僕らのクラス』*Entre les murs*（原題『壁の間で』2008年カンヌ映画祭パルムドール賞受賞）（フラン

2) フランス映画には政府や官僚に批判的なものも少なくない。おとり捜査と税関職員が無責任を批判した『ジブラルタルの罨』*Gibraltar*（2013年）、外務省についての漫画を映画化した *Quai d'Orsay*（2013年）

ソワ・ベゴドーの小説の映画化) はさまざまな出身の子供で構成された困難校での授業風景を描いている。『アデル、ブルーは熱い色』*La Vie d'Adèle* (原題『アデルの生涯』、2013年カンヌ映画祭パルムドール受賞) 受賞は作品の価値を保証するものではないが、授業で『マリアヌスの生涯』(18世紀小説)の恋愛感情を説明する場がこの映画の題名やテーマとの関連を示唆している。『危険なプロット』*Dans la maison* (原題『家の中で』2102年 François Ozon 監督によるファン・マヨルガの戯曲の映画化) では高校の授業の作文を通して創作と現実の間の反映、解釈、空想の関係や、それによって作られていく親子や師弟の関係を描いている。教師は特にフローベールを例に引いているのは、テーマの一つがフローベールの『ボヴァリー夫人』と共通の既婚の女性との関係というだけではなく、フローベールの文体が芸術的に模範とされているからである。この小説はフローベールが言ったようにテーマよりも芸術的完成度によって評価される作品であるが、フランスでも、歴史的な意味ではなく、教科書的、模範的な文学は懐疑の目で見られている様子が、『ボヴァリー夫人とパン屋』*Gemma* (2014年) でのカリカチュアでもうかがわれる。女性の就業率も離婚率も高いフランスでは19世紀の既婚女性の状況自体は共感呼べないので、英国から田舎へ移住したデザイナーの夫婦に置き換えられている。文学に取り憑かれたパン屋が現実と小説を混同することで起きる悲喜劇である。ゲームの方に興味があって小説好きの父を揶揄る息子など、教科書的という意味で古典的な文学好きに対する皮肉になり、フランスにおける文学の重要な位置が揺らいでいることを示している。

しかし、様々な批判を加えながらも、移民の子供などの文化的多様性を越えて古典的教材や注釈や論文という伝統的教授方法が現在にも適用されている。フランス文化が連帯や理性を重んじるというのはフランス人が国民性を形成する過程で、習慣や教育によって作られた伝統といえるだろう。

2 フランス文化の流れ

フランスでは古典主義、19世紀にはロマン主義、現実主義、20世紀には超現実主義、実存主義、構造主義というように主義とつく思想的な流れが作りだされてきた。前のイデオロギーに反発して次のイデオロギーは作られていく。それまでの芸術至上主義や現実主義の傍観者の立場に対して、実存主義は現実の変革をめざす。それに続く構造主義は、実存主義の人間の主体性による世界の創造という考えに対抗して形成された。現実主義と象徴主義は19世紀後半に併存し、反発をしあっていた。また、古典主義は17世紀に形成されただけでなく、様々な時期に出現して、多様な様相を呈している。まず、その流れについて概観する。

17世紀に新旧論争と呼ばれる古典を重んじる古典派と進歩を重んじる近代派との論争が生じたが、古典主義は、このイデオロギーに従って文化が作られただけではなく、この時期の文化をモデルに作られていった。それはさまざまな時代にさまざまな形で現れてきた。新古典主義は、18世紀にも19世紀の文化や美術にも見られる。20世紀初頭の極右による新古典主義は、古典主義と国粹主義が結びついた例である。この時代には印象派の画家ルノワールやセザンヌ、ピカソも古典主義を自分の美学にしている時期がある。

古典というのは本来古代ギリシャ・ローマの文化を意味しているし、フランス以外にもこの特色を持つ芸術家が存在する。ゲーテの古典主義は20世紀初頭のフランス文化の古典主義に大きな影響を与えた。簡単なイメージとしては、フランス式庭園を挙げることができる。理性や良識を中心概念とした非常に人為的な美学である。イギリス、日本、中国の庭園のように自然の風景を模るとか取り入れるということがほとんどない、幾何学的な調和や均衡が目指されている。

古典主義自体が後世によって形成された概念であるが、それはフランスの文化の顕著な特色とされ、様々な解釈がなされてきたし、時代によって意味も異なっている³⁾。Alain Viala は次のように説明している。「教育上の古典を決めるのは社会的問題であって作品の受容にかかわることである。古典的には二つの意味がある。広義に古い伝統的、もう一つの意味は偉大であることである。古典的なのは模範と見られる作家である。作家によって模倣するように選ばれるものである。この模倣は形に関わり、政治的である。古典を構成する模範となることは社会参加によることである。従ってそれは与える価値を意味している。歴史的に、古典の理論よりもある時点の教養高い人の精神状態を考えた方がよい。模範となるのは、選抜の道具として、イデオロギーとして、学校制度に入る作家である。古典になる過程は正統化、出現、聖別化、永続性の過程を経る。受け入れるから、そのために受け入れられるという交換の論理から慣習として頭にたたき込む過程は *habitus* (行為の社会化された体現を獲得する反応) の形成の過程である。古典的なものは *habitus* を形成するものである。もっと意味のある言い方をするなら模範を作り出す表現である。古典の価値は制度の効果によって一時的なものではなくなる。以上が明らかにすることは明晰、繊細、偉大、理性と感情の調和、洞察……社会化の特徴が美学に刻み込まれるということである。*habitus* は政治的な、自己同一性の認識の象徴的構成によって秩序づけられている。自己同一性を形成しながら模倣するのである。古典主義が得ようとしているのは伝統を自分のもの

3) 数多くの研究書がある。Alain G netiot, *Le classicisme*, PUF, 2005

としながら自己肯定をするフランス文化の自己同一性である。つまり古典的なというのは自己同一性に関して一致するための一致と葛藤の対象である。』⁴⁾

歴史的には17世紀18世紀に公的なイデオロギーになっていった古典主義に対抗する形で、19世紀にロマン主義が形成された。スタンダールの『ラシースとシェイクスピア』、ヴィクトル・ユゴーの『エルナニ』騒動は文学史上それに関わる論争である。このロマン主義に対照的な形で、現実主義は形成されていった。各作家にこれらのカテゴリーが割り当てられるわけではない。フローベールは文学が現実の写実というよりも、書かれることによって作り出される芸術であると考えた。また、ロマン主義はフランス文化の重要な側面でありながら、フランスでは一時期を除き、あまり中心的にならないカテゴリーである⁵⁾。

「明晰でないものはフランス語でない」という使い古された言葉でもわかるように、フランス文化は批判や論理性を重んじる。それに対して、デリダなどフランスの現代思想が難解な言葉や科学から借用した言葉を使うが、これは明晰、簡潔という特徴の古典主義的な見方に対抗している。古典主義の定義や現代性との関係は現代でも論争のテーマになっている。

古典主義は19世紀以降の公教育の中でも支配的な価値を付与されていた。19世紀の文化が同時代の文化として評価が定まっていなかったからでもあり、19世紀末から20世紀にかけて19世紀の作家も教科書に大幅に取り入れられていったことは研究されている通りである⁶⁾。古典主義は良識や効用を文学の基準にしているから教育的配慮として望ましいことも考えられる。しかし、一方で19世紀から20世紀にかけて社会の価値観は大きく逆転していった。フランス共和国の基礎としている自由、平等、博愛という人権思想はこの時代に社会的に取り入れられていった。文化的な人為的な規則からの自由は古典主義の規則遵守と相反する。ロマン主義の理念が生まれてきた所以である。ではなぜそれにもかかわらず古典主義が教育の、そして文化創造の理念として生き残り得たのだろうか。

4) Alain Viala, «Qu'est-ce qu'un classique?», *Littératures classiques*, 19, 1993, pp. 11-31.

5) ユゴーの『レ・ミゼラブル』はその良い例である。この話は映画、ミュージカル、アニメとさまざまな媒体を使って語り継がれている。イギリスのミュージカルの映画の大ヒットは最近のことである。批判や皮肉が間接的でなく理解しやすいのかもしれない。フランスでの評価は必ずしも高くない。単純化された人物設定や波乱万丈の筋が、上記のように幾つもの文化的な動きを経由し、世界各地の文化があふれているフランス文化には不自然に感じられるのかもしれない。

6) 立川信子『ジッドに対するスタンダールの「影響」』愛媛大学法文学部論集人文学科編第39号、2015年、pp. 1-24

古典主義は古代ギリシャ・ローマの文化の模倣を尊ぶ⁷⁾。従って20世紀から改革が続いて、人文教育よりも科学教育が取り入れられてきたが、今でもレトリックではなくても論述法は人文教育に哲学として中心的な位置を占めている。フランス式の教育が成功しているかは場合によって異なっているし、現在改革が検討されている。

古典は模範になる、教科書に使われるという意味もある広範囲な意味を持った単語であって、時代によって人によって意味が違っているが、共有されている特徴もある。古典主義が生きているのは、プッサンの絵画、ヴェルサイユの庭園などまず芸術性の高さのためである。形は簡素で、明確で、調和、均衡、秩序という形容が相応しい。ロマン主義のドラクロワの劇的な絵画と対照的な特色である⁸⁾。

次にそれがフランスの国民文化という定義に19世紀後半なっていった。共和国の国民教育の指針として王制下の古典主義が挙げられたのであるが、国民性の形成と秩序をめざす理性と明晰さの教育として取り上げられた。さらに人権の尊重や人間性のより広い範囲での承認という19世紀の社会的動向に対してむしろ規範が重視されるようになる。特に教育の世俗化、即ち教育と宗教の分離にみられるようにキリスト教の影響力が弱くなっていく中ではモラルの重視は不可欠で、古典主義というのは人々に快適であること、礼儀、規則に合うこと (bienséance) を強調する理論であるから適しているといえるだろう。教育に文学は生き方のモデルを提供してきた。現実を描くことをめざすことからみても現実主義の文学は特にそう言える。スタンダール、バルザック、フローベール、ゾラなどの小説では、野心的な青年ジュリアン・ソレル、ラスコニヤック、懐疑的なフィリップ・モロー、挫折を越えて続けられる努力による社会を変化させようとする労働者など時代を代表し、典型的な型となる人物を描いている⁹⁾。

つまり、フランスでは各時代や社会に応じた文化の動きが作られ、それぞれの中で

7) 鹿島茂は19世紀の古代ギリシャ語やラテン語の高等教育を受けても復習教師にしかなれない人々を現代社会の高学歴ブーアと比べている。教育はその時代の職業の需要にいつでも合っているわけでもないし、また教育の目的がその時代の職業訓練以外の意味を持っていることから考えても合っていないのがたぶん常態だろう。鹿島茂『職業別バリ風俗』白水社、2012年

8) Maurice Denis, «De Gauguin et de Van Gogh au classicisme», *L'Occident*, mai 1909, repris dans *Théories*, 1912, 1920, *op. cit.*, pp. 168-169.

9) 古典は日本では古文(文語文法による)と漢文を総称して高校の教科になっている。日本でも国語教育は日本文化を学び、理解力を深めることを目指しているが、人生や社会を考える上ではどういう役割をしているのだろうか。自主性を伸ばすのが教育、人生の主人公という見方が幻想だということのは就職活動に関する書籍にはよくでてくる。たとえば、それを表現するのに、ガンダムはいわば能力ある主役で少数、ジムは普通の端役で多数という比喻を使っているが、他の文化的原型は現代の日本の社会にあるだろうか。(常見陽平『僕たちはガンダムのジムである』日本経済新聞社出版2015年)

作中人物に具現化されたモラルが作られていく。その中で、古典主義は何度も復活する根強いイデオロギーであり、その基礎が19世紀から20世紀からの共和制と国民国家の教育によって再生され、偏在する美術や建築などの遺産によって記憶に保たれてきたと言える。理性、調和、秩序、良識、伝統尊重といういわば拘束、モラルは、自由、人権尊重の方向へ向かう社会には必要であるからであろう。

美学的には古典主義は多くの反論の出た人為的な美学であるから、理性よりも感性を、規則よりも自由を、ジャンルの分類よりも自然な創造を、という見方はロマン主義の主張であり、ロマン主義以降の古典主義は、それを取り入れた形になる。古典主義や古典という概念はしたがって、複雑な矛盾する概念になっていく。アントワヌ・コンパニオンはこの世代を1890年代の古典主義者と総括している¹⁰⁾。その一人であるヴァレリーにおける「古典」をミッシェル・ジャルティは「古典的あり方」と呼び、それは芸術創造における鍛錬を意味している。「ロマン主義者は鍛錬によって古典主義になる」を引用している¹¹⁾。古典主義の特徴はそのどの側面を重視するかによって全く反対の特色を持つものも含み得るものである。文化も模範も広い意味の文学と文人の集まりの中で具体的な概念になっていく。

3 マラルメとジッド

コンパニオンが挙げている古典主義者の一人アンドレ・ジッドは後にレシ（小話）と名づけられることになる小説群の初め、『狭き門』から最後の小説『テゼ』までの小説の理念に、簡潔な表現、単線の筋など、理念的に古典主義を想起する要素はあると考えられる。ジッドは古典主義の作家として同時代の批評家に評価されているし、自分でも古典主義を掲げる評論などを書いている。趣味が古典主義的であることはその風景に関する趣味からも明らかである。しかし、文学を志した時には象徴主義に触発されていた。具体的には友人ピエール・ルイ、特にマラルメに魅了されたためだった。マラルメこそが初期の模範となったのである。マラルメはユゴーのサロンに出入りしていた。それは現実主義の小説の最盛期でもあった。

芸術、文芸の創作はプラトンの『国家論』、アリストテレスの『詩学』以来、模倣（ミーメシス）と同一視されてきた。古代ギリシャの神話、演劇、叙事詩などを通し

10) 立川信子『反モダンについての考察～アントワヌ・コンパニオンのアンチモダンの概念をめぐる』愛媛大学法文学部論集人文学部編第35号、2013年、pp. 49-67

11) Jarrety, Michel, «Valéry: du classicisme sans classicisme», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, avril-juin 2007, 107e année, no 2, pp. 359-370.

て、模倣の理念を受け継いでいる現実主義は19世紀から20世紀にかけて、フランスで特に小説の中心的な創作理念となった。しかし、現実主義は19世紀後半から文学の理論として疑問視される。

文学史の文脈では、「1830年代から1880年代までゴーチェなどのパルナス派は、芸術至上主義、即ち芸術は有用性とは関わりなく、芸術は形の彫琢による美という内的価値を追及する。これはロマン主義の政治的・道徳的関与に対抗し、また金になるもの、効用のあるものだけが価値があるといういわばブルジョワの価値観に抗議する見方である。マラルメやヴェルレーヌも最初はこの流れに属していた。」

「モレアスが1886年にフィガロに『象徴主義、文学宣言』を発表する。象徴主義とは、観念と世界の間の接点である象徴によって詩は外的で表層的な表れではなく『最初の観念』を表すものである。世界を知覚する者の主観的ヴィジョンによって表象としての世界を考えるショーペンハウアーの観念論に基づいている。ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーなど。共通しているのは象徴を中心概念とすることだが、難解、神秘、暗示を重視する。象徴主義はデカダンス運動に近いが、1885年から衰退し始める。1891年にはモレアスが離れ、ローマ派を作る。1880年代は小説では自然主義と心理小説が盛んであったが、繰り返しが多く大衆に迎合しているこういう小説に対する反作用である。詩は現実をもとにするという重りから離れて固有の論理に従うべきであると考えられるようになる。」¹²⁾

このように19世紀後半の象徴主義は現実主義に対比された考え方であり、現実主義は現象面にとどまっていた、本質を捉えていないと主張する。文学は本来いずれの理念にも偏ることのない複雑なものである。たとえばフローベールは芸術を至上の価値と考えていた。めざしたのは「無についての小説」livre sur rienである。テーマが重要ではない小説という意味も含んでいる。

また、象徴主義は詩の中から生まれてきた運動である。小説はさまざまな要素によって成り立っている。小説は模倣に詩よりも近いジャンルである。小説と詩の間には韻文であるかどうかではなく、伝達するものそれ自体の大きな違いがある。詩は言語それ自体が対象であるに対して、小説というのはそれ自体が言語よりも構成や意味を中心にしている。初期のジッドがめざした象徴主義的な小説というのはそれ自体が矛盾をはらんでいる。象徴主義の小説というのが不可能であるということはすでに論じられた。象徴主義の小説としてエドアール・デュジャルダン、アンドレ・ジッド、

12) Paul Aron, Denis Saint-Jacques, Alain Viala (direction), «Parnasse», «Symbolisme», *Le dictionnaire du littéraire*, PUF, 2014, pp. 549-550. pp. 752-753

レミ・ド・グールモン、マルセル・シュワブを分析した研究がある¹³⁾。各作家において象徴主義によってそれまでの小説手法とは異なる手法を分析している。ジッドの現在までの研究で、象徴主義が、特に初期の作品のテーマなどに大きな影響が見られることが分析されている¹⁴⁾。純粹という概念は両者に共通している。Moutoteはマラルメの「本」の概念の後世の作家への影響を研究し、ジッドに対するマラルメの影響は「外側だけで、後発的なものであり、ヴァレリーとマラルメのような内的接触ではなかった」と言っている¹⁵⁾。確かに次に見るようにジッドの記述は漠然としている。しかし、表面的と言えるだろうか。Jean-Michel Wittmannの研究では、マラルメの生き方や詩と関連する表象やそれに対する批判が『パリュード』に表れていると論証している。『地の糧』や『パリュード』はジッドが象徴主義から離れることを示す作品であるから、そこにマラルメに体现される芸術至上主義を批判する暗示が見られるのは当然だろう。この研究は作品のイメージを詳細に比較対照して、実際に深い影響を実証している。しかし、ジッドの評論やその後の作品に関してこの研究では触れられていない。ジッド自身が言っているようにマラルメの影響は人生に渡っていると考えられる。ここでの考察はジッドにとってマラルメとはどのような存在だったのかを評論と日記に見ることに限る¹⁶⁾。

まず、マラルメの詩は純粹で難解である。「最も高くそびえる純粹な最後のパルナス派である。」

Il [le Parnasse] finit abruptement avec Mallarmé, qui en est le représentant le plus altier et le plus pur – le nec plus ultra du Parnasse. «Verlaine et Mallarmé», *conférence- première de la série moderne – prononcée au théâtre du Vieux-Colombier*, le 22 novembre 1913, EC 497

マラルメの詩の難解さは生前から揶揄されることもあった。

13) Valérie Michelet Jacquod, *Le Roman symboliste: un art de l'«extrême conscience»*, Edouard Dujardin, André Gide, Remy de Gourmont, Marcel Schwob, Droz S.A., *Histoire des idées et critique littéraire Vol 447*, 2008

14) Jean-Michel Wittmann, *Symbolisme et déserteur; les œuvres «fin de siècle» d'André Gide*, Honoré Champion Éditeur, 1997

15) Frank Lestringnt «Du souci de pureté», *Puretés et impuretés de la littérature*, Garnier, 2015, pp. 251-274. Daniel Moutote, *Maîtres livres de notre temps. postérité du «livre» de Mallarmé*, José Corti, 1988, pp. 174-175.

16) André Gide, *Essais critiques*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1999, p. 403-416. EC と略す。

Gide André, *Journal I 1887-1925*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996. JI と略す。

Gide, André, *Journal II 1926-1950*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996. JII と略す。以下引用文中の下線は論文筆者による。

[...] Mallarmé garde et gardera longtemps encore la réputation d'être incompréhensible.
De là, à passer pour un mystificateur, il n'y a qu'un pas. *Ibid.*, EC 500

この難解さを古典主義の明快さと結びつけるのは一見困難であるが、マラルメの古典主義というテーマは生前から論じられてきた。

Signalons dans le numéro d'octobre de *La Phalange* un remarquable article d'Albert Thibaudet et dans le numéro de septembre de la même active revue une lettre judicieusement et discrètement moqueuse de Jean-Marc Bernard à propos de la discussion toujours pendante au sujet du «classicisme» de Stéphane Mallarmé. [«Vers et prose»] 1909 EC 205¹⁷⁾

たとえば古典的という概念をヴァレリーのようにに修練という解釈すれば成り立つ見方である¹⁸⁾。

次にジッドにとってマラルメは人生の模範であった。もっとも大きな理由は文学に至上の価値を見て、文学に人生を捧げる価値観と生き方であった。「彼のそばで初めて考えることの現実性を感じ、触れたのだった。」

Stéphane Mallarmé est mort.

[...] l'œuvre de Mallarmé demande, pour être comprise, une très lente et progressive initiation.

[...] IL PENSAIT AVANT DE PARLER !!!

Et pour la première fois près de lui, on sentait, on touchait la réalité de la pensée : ce

17) Thibaudet, Albert, *Mallarmé*,

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5679799q/f13.item.r=Thibaudet,%20Albert%20%20%20phalange>

Albert Thibaudet, *La Poésie de Stéphane Mallarmé*, 1926 ; ティボーデ (田中・立仙訳) 『マラルメ論』沖積舎、1991

Lettre de Jean-Marc Bernard, *Phalange* septembre 1909

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5418181h/f95.item.r=phalange>

「マラルメを古典的天才というのは明晰さを脇においても少し逆説的である。というのは [...] そこにある論理は難解なソネの論理と共通点がない。逆に私は現代詩人の作品の根底には一種の経験主義を [...] を見る。」(ベルナルの手紙)

18) また、フランス的ということは当時重要な特色であったが、マラルメはフランス的の詩人でもある。Tout au plus est-ce là l'esprit public. Si peu public que furent Laforgue, Rimbaud, Mallarmé, je les crois aussi parfaitement françaises encore que toutes autres, «Chronique générale Seconde visite de l'interviewer» 1901 EC 135

que nous cherchions, ce que nous voulions, ce que nous adorions dans la vie, existait ; un homme, ici, avait tout sacrifié à cela.

Pour Mallarmé, la littérature était le but, oui la fin même de la vie ; on la sentait ici, authentique et réelle. Pour y sacrifier tout comme il fit, il fallait bien y croire uniquement.

«Stéphane Mallarmé», *Hommages, L'Ermitage* d'octobre 1898, EC 829-833

時期的には、初期の頃には作品から大きな影響を受けている。具体的な例については分析がある。ジッドとマラルメが初めて会うのは1891年2月に『アンドレ・ワルテルの手記』の賛辞をマラルメが送った後であり、ジッドはマラルメの火曜会に通うようになる。『パリュード』についてジッドは皮肉を指摘されている。(EC1409) マッソンによると両者の関係は単純ではなく、両者の大きな違いは感じられる世界と公衆が重要か否かである。マラルメの晩年にはジッドはマラルメに対して距離をもっていたとマッソンが考えている。

Pourtant, les rapports de Gide avec Mallarmé ne sont pas simples, et ses réactions à cette mort le montrent bien : il évite de parler de l'œuvre. [...] C'est que, depuis son premier voyage en Algérie, Gide a découvert l'importance du monde sensible et qu'il s'apprête à affirmer pour l'artiste l'importance du public, deux réalités que Mallarmé supprimait, pour rivaliser avec l'absolu. EC 1210 note

かなり早い時期から距離はあったとジッド自身は言っている。

[...] je ne crois pas avoir pour M. Mallarmé d'admiration folle et aveugle. Ainsi je ne puis admirer autant que ses vers sa prose ou tous ses vers autant que certains.

Novembre 1894 J188-189

しかし、歴史や政治、偶発的なものに対する無関心はマラルメやドイツ哲学の影響である。

Oui, je paye aujourd'hui mes dénis d'antan, de ce long temps où me paraissait indigne de réelle attention tout ce que je savais transitoire et ressortissant à la politique, à l'histoire. L'influence de Mallarmé m'y poussait. Octobre 1935 JII 505

両者が異なるのは、『地の糧』に表れているような感性と生きることそのものへの目

覚めによってマラルメの超俗的な文学観に違和感を感じるようになったためとマッソンは説明している。しかし、生きることに對する無関心な文人はマラルメだけではない。カトリック作家の多くに見られる。

Est-ce son subjectivisme quasi religieux qui impose à Villiers sa méconnaissance, quasi religieuse aussi, de la vie ? ou au contraire cette méconnaissance précède-t-elle, lui dicte-t-elle le subjectivisme, comme pour se justifier ? Je ne sais. - La même question peut d'ailleurs se poser, et vainement, pour tous les «écrivains catholiques». Baudelaire, Barbey d'Aureville, Hello, Bloy, Huysmans, c'est là leur trait commun : méconnaissance de la vie – mépris, honte, peur, dédain, il y a toutes les nuances, - une sorte de religieuse rancune contre la vie. [...]

Villiers parle de «ceux qui portent, dans l'âme, un exil»; «tant que traîna le simulacre de sa vie», dit Mallarmé, parlant précisément de Villiers – car la vie devient alors aisément une sorte de parade, ironique et déclamatoire, parfois cabotine ; et le rôle de l'artiste est, n'y croyant pas, de jeter sur son néant un prestige, - ou mieux, d'opposer à ce néant avoué une autre vie, un autre monde, monde créée par lui, factice, qu'il prétendra révélateur de l'idée pure que bientôt il appellera le vrai monde – l'œuvre d'art. «Villiers de L'Isle-Aam: *Histoires souveraines*» EC 75-76 1900

むしろジッドによると、マラルメはこの時代の詩人が生から離れる原因であると思うが、自分は逆にマラルメの影響で普遍的な人間の感情を描こうとするようになったと考えている¹⁹⁾。

Je crois bien que Mallarmé fut cause de cet extraordinaire détournement de la vie qui fut le mot d'ordre des poètes de cette époque et de ce clan [...]. Certainement je protestai contre

19) Un personnage auquel «ma noble faculté poétique» (comme disait Mallarmé) me contraint à prêter vie, juin 1930 JII 202

Quel que soit un auteur, et si difficile soit-il, qu'il ait nom Rabelais, Maurice Scève ou Dante, ou, plus près de nous: Rimbaud, Lautréamont, Mallarmé, ou Joyce, c'est toujours par le côté le plus humain, le plus généralement humain qu'il sied de l'aborder 1941 EC 736

«Il (Francis Jammes) est surtout de son temps», disait-il encore de Francis Jammes, comme s'il (Emmanuel Signoret) pressentait le succès de cette naturelle et catholique poésie, puis enfin ajoutait : «J'apprends par Moréas que Mallarmé écrivit : 'Tricher avec son temps est en art l'acte capital.'»

«Préface aux *Les Poésies complètes* d'Emmanuel Signoret» 1908 EC 449

cela, et tout mon effort, bientôt, fut au contraire de rapprocher mes écrits de la vie. Mais, où je me crus bien habile (et où peut-être je me trompai – et ceci, sous l'influence de Mallarmé encore) ce fut en ne retenant [...] que des émotions, des passions, des sentiments, susceptibles d'être éprouvés par tous les hommes. février1933 JII 400-401

マラルメは精神を麻痺させる危険性のある文人である。作品を出発点ではなく到達点と考えるからである。

[...] Mallarmé ne prit-il pas le soin paradoxal, dans à peu près chacun de ses poèmes, de nous avertir de l'impuissance de sa plume et du néant de son effort ? Que peut valoir une esthétique dont le premier souci est de se déclarer vaincue ? [...]

Je ne me poserai point en défenseur d'une cause que je ne peux faire mienne car je tiens Mallarmé pour un maître assez dangereux (encore que je ne le croie coupable de paralyser que des esprits sans vigueur) dont l'œuvre est à considérer non comme un point de départ, mais comme un aboutissement, un point extrême, un parachèvement...

Je me pose en lecteur bien neuf qui pense raisonnablement qu'une théorie, pour intéressante et importante qu'elle soit, n'a jamais servi non plus à faire l'œuvre d'art qu'à la nier ou la détruire, et que les vers ne doivent pas espérer d'autre défense que leur propre beauté. «Contre Mallarmé» 1909 EC156-157

又、確かにジッドはあまり作品そのものについて語ってはいない。これはジッドの文学批評全般にいえることではある。婉曲な表現を好むという古典趣味だけではない。賞賛しているのはマラルメの詩について音韻の素晴らしさと推敲の努力である²⁰⁾。

[...] Si je pense que nous avons besoin de héros, [...] c'est à me servir de ce mot pour designer un ordre particulier de vertus, [...] presque indépendamment de leur œuvre. [...] à Flaubert et à Mallarmé. [...] à l'extraordinaire exemple de désintéressement qu'il nous

20) 1910年にも同様である。

Déjà Barrès écrivait : «Sur le travail Baudelaire peinait... Après tant de veilles, l'œuvre de cet acharné est courte.» Il est vrai qu'il ajoutait déjà, judicieusement : «Chez lui le moindre vocable trahit l'effort par où il atteint si haut.»

Note Le nom de Mallarmé serait, ici, aussi bien à sa place que celui de Baudelaire. «Baudelaire et M. Faguet» 1910, EC 254

onna. [...] d'aujourd'hui : le rattachement du spirituel au temporel. [...] L'incantatoire sonorité de ces vers était telle qu'ils conservaient le charme étrange de ce mystère, en dépit de l'explication qu'on m'en donnait. «Interviews imaginaires XII Il y a cent ans naissait Saint Mallarmé l'ésotérique» 1942 EC367-372

Les vrais, les seuls dont nous avons besoin, sont ceux qui ne se laisseront rebuter par rien; qui [...] prennent appui sur les résistances ; dont l'énergie, devant l'obstacle, se contracte et s'apprête à bondir. [...] Étudiez les divers «états» de Mallarmé, de Baudelaire : vous verrez que leurs plus beaux poèmes sont aussi les plus travaillés. «Interviews imaginaires, XV», 1942, EC385

マラルメの創作の努力、非人称性、特に言語や本質に関する考えはジッドに決定的な影響を及ぼしたと言える。言語を金銭にたとえるのはマラルメから始まったわけではないが、コミュニケーションの手段として、交換の手段としての金銭にたとえるが、言語の持つ形と意味という両面と、本質という見方は象徴主義のテーマと言える。それはマラルメによって触発されたものであり、ジッドの作品には常にあるテーマでもある。言葉は現実を伝えるわけではなく、本質を模索する手段である。従って使われ方によっては欺くことにも使える。言語は具体的な意味を伝達する以上の機能がある。それは事物の本質を示す。ジッドが次のマラルメの『詩の危機』の有名な部分を引用して特筆している²¹⁾。

21) 「物語ったり、指示したり、更に、描写することさえも、これは何の造作もなく事が運ぶ。そして、[実を言えば、これは、] 各人にとって、人間が考える思想を交換するためだけならば、恐らく、貨幣を黙って取ったり、黙って他人の手の中に置いたりする事だけで事は足りる、ということなのだろうけれども、このような言葉の初歩的な使用行為も一般的な報道の用は達しているのである。ところで、報道といえ、文学を除いて、現代の諸々のジャンルに亘る書物のすべてがこの「報道という」性質を帯びている。

しかしながら、一方において、自然の一事象を言葉の働きに即してその振動的なほとんどの消滅に置き換えてしまうという、この驚異すべき営も、仮にこの振動現象から、単に手近にある具体的ななしかじかの事物の記憶が蘇って来るという狭苦しい制限などはなしに、[その事象の] 純粹觀念そのものが放射されるためでないとしたら、そもそも何の役に立とうか。

例えば私が、花！と言う。すると、私の声がいかなる輪郭をもそこへ追放する忘却状態とは別の何ものかとして、[現実の] あらゆる花束の中には存在しない花、気持ちの良い、觀念そのものである花が、音楽的に立ち昇るである。

言われた言葉とは、大衆が最初にそれを取り扱ってみる際の、あの流動容易な、万物を代表する通貨めいた一つの機能とは反対に、何よりもまず、夢であり歌なのであって、「詩人」の許にあっては、非現実的創造 fiction に捧げられた一芸術の本質上、必然的に、己に潜在する非現動の力を再び取り戻すのである。」Stéphane Mallarmé, «La crise de vers», *Divagations, Œuvres complètes II*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade» 2003, pp.212-213 ; 『マラルメ全集Ⅱ、ディヴァガシオン他』松室、菅野、清水、阿部、渡辺編集、筑摩書房、1989年、pp. 241-242.

[...] j'imagine volontiers qu'un numismate artiste puisse s'éprendre de la beauté des monnaies, [...] mais encore qu'il ne se tienne pour satisfait vis-à-vis de la pièce de monnaie, que lorsqu'il ne verra plus en elle qu'une médaille, et qu'elle se sera dépouillée complètement à ses yeux de sa valeur commerciale pour assumer du même coup une valeur plus élevé. C'est ainsi que Mallarmé considérait en soi chaque mot.

Un désir indéniable à mon temps est de séparer comme en vue d'attribution différente le double état de la parole, brut ou immédiat ici, là essentiel.

Narrer, enseigner, même décrire, cela va et encore qu'à chacun suffirait peut-être, pour échanger la pensée humaine, de prendre ou de mettre dans la main d'autrui en silence une pièce de monnaie, l'emploi élémentaire du discours dessert l'universel reportage dont, la littérature exceptée, participe tout entre les genres d'écrits contemporains.

A quoi bon la merveille de transposer un fait de nature en sa presque disparition vibratoire selon le jeu de la parole, cependant, si ce n'est pour qu'en émane, sans la gêne d'un proche ou concret rappel, la notion pure ?

Je dis : une fleur ! et, hors de l'oublie où ma voix relègue aucun contour, en tant que quelque chose d'autre que les calices sus, musicalement se lève, idée même et suave, l'absente de tous bouquets.

Au contraire d'une fonction de numéraire facile et représentatif, comme le taite d'abord la foule, le Dire, avant tout, rêve et chant, retrouve chez le poète, par nécessité constitutive d'un art consacré aux fictions, sa virtualité.

Mallarmé devait pousser plus loin sa vigueur.

Le vers qui de plusieurs vocables refait un mot total, neuf, étranger à la langue et comme incantatoire, achève cet isolement de la parole : niant, d'un trait souverain, le hasard demeuré aux termes malgré l'artifice de leur retrempe alternée en le sens et la sonorité, et vous cause cette surprise de n'avoir ouï jamais tel fragment ordinaire d'élocution, en même que la réminiscence de l'objet nommé baigne dans une neuve atmosphère.

[...] Ici vraiment, [...] Mallarmé, quittant le dernier rocher du Parnasse, perd toute attache avec son ombre. [...] il (Mallarmé) parle de «Un coup de dés jamais abolira le

hasard» comme de «cette tentative, une première, ce tâtonnement » [...]

«Verlaine et Mallarmé», *op.cit.*, le 22 novembre 1913, EC504-508

マラルメの文学に関する考えの基本が人格的なイメージとともにジツドの人生の指針になったといえる。また、パルナスから象徴主義に渡る文芸運動とマラルメの姿勢や考えの中に具現されている文学的理想や言語の概念がジツドの文学を形成する基礎を作ったからである。眼前に生きた人格化した模範はモラルを形成するのに非常に役立つ形象である。文学理念、さらにはモラルの形成の例をマラルメとジツドの関係に見ることができるだろう。

マラルメの文学活動は複雑であり、多くの研究がなされており、象徴主義というものも多様な相貌を呈しているので、さらに詳細な分析が必要である。また、文化とモラルとは、文学上のモデルとの関係にかぎらず、社会が機能していく上でさらに広範に考えるべき問題であることは言うまでもない。